The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	18世紀ドイツの旅行記・地理誌とその受容について：日本の盲人についての情報とその流布を例に
Author(s)	吉田，耕太郎
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2019, 16, p. 47-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72770
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

18 世紀ドイツの旅行記・地理誌とその受容について

―日本の盲人についての情報とその流布を例に―

吉田　耕太郎

はじめに

本稿は、18 世紀ドイツで出版された地理誌や旅行記を題材として、日本についての情報がヨーロッパでどのように流布したのかをたどるものである。もちろん、ヨーロッパ世界に伝播した日本の情報といっても多岐にわたる。そこで本稿では、日本の盲人の情報に着目することにしたい。18 世紀当時、ヨーロッパを旅立ち、はるか遠方の日本を実際に訪問し、日本についての情報を自らの手で集めることができた人は、非情に限られていた。しかしその一方で、18 世紀は旅行記、とりわけ個々の旅行記をまとめたアンソロジーが読まれ、日本を含む世界各地の地理誌も多数発刊された時代であった。その意味で、18 世紀の地理誌や旅行記は、日本についての限られた情報を、幾度となくとりあげて流布することで、日本についてのイメージを作りあげたメディアであった。

本稿の問題関心が、ヨーロッパの地理誌や旅行記のなかに描き出された日本のイメージであるといっても、本稿は、18 世紀のヨーロッパの人々が日本をどのように見たのかをあきらかにするのでも、またヨーロッパと日本の歴史的な文化接触を描き出すものでもない、ましてやヨーロッパ人がつくりあげた日本イメージを誤りとして、正しい日本像を提示するものでもない。むしろ本稿を貫いているのは、日本の情報がヨーロッパ内で流布されることで、日本のイメージがその都度形成されては変形を被る、情報の加工のプロセスについての関心である。

ルジューンは、1780 年に出版した『日本と日本人についての批判的かつ哲学的考察』[1]のなかで、キリスト教徒が排除されているが故に、古くから流布している日本ついての記述の真偽を判断するための手がかりとなる新たな情報を得ることは、18 世紀後半になっても依然として難しいと、18 世紀後半の日本の情報の少なさを書き残している。そもそも日本についての情報が少ないことに加えて、日本での布教活動をすすめる宣教師の報告や、日本での通商を有利にすすめるべく集められた商館の報告書や参府日記など、すべての情報が一般の人々の目にふれたわけではなかった。もちろん本稿が取り上げるのは、こうしたごく一部の人だけがアクセスできた日本の情報ではない[2]。何度も繰り返すが、18 世紀後半は、多数の旅行記や地理誌が出版され、多くの人に読まれた時代であり、日本について真偽の判断がつかないわずかな情報が、読者公衆に広く流布していたことに、本稿は着目

したい。というのも、限られた情報が幾度となく公刊され流布するなかで、情報の編集者や受け手である読者の関心が、情報の取捨選択そして情報の修正加工へと反映されたからだ。本稿がとりあげる、日本の盲人についての情報が流布する過程からも、当時ヨーロッパの人々が抱いていた盲人への関心が織り込まれていることを、読み取ることが可能である。このように本稿がたどりたいのは、情報の変化、別の表現を使うならば、テクストの参照が織りなしていく創造的なプロセスである。

１．時代状況 1　旅行記と地理誌の区別

言うまでもなく、地理誌とは、各地域の情報をあつめた資料である。土地の広さ、河川や山などの地形情報、気候、植生、人口、政治体制、宗教、産業、医療体制、教育制度などの項目で、ある地域の情報を網羅的に列挙したものである。18 世紀後半に地理誌の基礎を築いたアントン・フリードリヒ・ビュッシングは、日本を含むアジアの地理誌を書く上で、次のような言葉を残している。

> 「私自身といえば、本書であつかう三つの地域の国や地域［中国、日本、東南アジア地域］に関連する旅行記や報告を網羅した蔵書 eine ganze Bibliothek を所有していますし、いまも収集を続けているのです。」[3]

この引用から、地理誌の記述においては、旅行記などの資料がなにより重要であったことが読み取れるだろう。このビュッシングの発言から、旅行記のような一次史料を編集したものが地理誌であると、旅行記と地理誌の相違点を定義することも不可能ではない。たしかに、旅行記を一読してみれば、実際に旅行した人物が旅行中に見聞したことが書き留められており、網羅的に情報が蓄積されている地理誌は、旅行記のなかの記述を取捨選択し整理して学術書として編集したものといえる。

とはいえ単純に、旅行記を、旅行者が体験を書き留めた一次資料とみなすこともできない。旅行記の出版と同じように古くから、たとえば Methodus Apodemica という書名を冠した、どのように旅行すべきかをアドバイスする旅行指南書も出版されていた。こうした書籍の存在は、旅行者が自分の関心のおもむくままに旅行し、そこで得た体験を旅行記（またはそのもととなるメモ）として残していたわけではなく、むしろ理想的な旅行のありかた、つまり旅行においては何を見聞すべきか、情報収集の効果的なモデルというものに、旅行者が関心が抱いていたことを伝えているといえるのだ[4]。こうした旅行ガイドを繙いてみれば、正しき旅行者は、訪れる場所の地理的情報はもちろん、人口、面積、見どころ（教会施設、学校組織）、産業など、旅先にて調べる質問を事前に用意しておかなければならず、用意した質問を埋めるかのように見聞していくことが求められている。18 世紀末に

出版されたレオポルト・ベルヒトルドの旅行指南書[5]では、旅行者が旅先で確認すべき 2443 もの質問が列挙されている。このような質問事項をあらかじめ頭に入れ、その答えをメモに残しておくことで、旅行が終われば、自分だけの旅行記または地理誌ができあがるというわけだ。

同じく 18 世紀末に出版された、ポッセルトの旅行指南書[6]でも、旅行者の事前の準備として、旅程の計画すること、訪れる予定の場所について（それも各地の建築をみるのか、収蔵された絵画をみるのか、植生を調べるのか等々、その旅行の目的に応じて）予習しなければならず、そして旅に必要な情報を旅行ガイドや地理誌等から必要な箇所を抜粋しておくこと（なぜなら旅行ガイドは、一般的な読者を想定した一般的な内容のことが書かれているのだから）、そして旅行者が旅行中に書き留めることのできる旅の手帳 Reisehandbuch[7]を用意することを推奨している。ポッセルトの旅行指南から浮かび上がるのは、事前に複数の旅行ガイドや地理誌などを手に取り、それらを検討、取捨選択して旅行者が自分だけの旅行ガイドを作成し、そして旅行中には、各地で得た情報を書き込んでいる旅行者像なのである。

このような当時の指南書の記述を考慮に入れるならば、そもそも旅行というものは、すでに流布している旅行記や地理誌を参照して計画されたものであり、また旅行で得た情報もまた、こうしたすでに流布している情報を再確認または訂正するようなものであったといえるだろう。別の言い方をすれば、旅行者は、あらかじめ情報を集める型のようなものを用意していたということ、つまり旅行前に参照したであろう地理誌のようなものを読んで準備していたというわけだ。このような点で、旅行記と地理誌は簡単に区別できるものではなかったと言わざるを得ない。たとえば、ヨーロッパにおける日本の盲人情報のソースであった、ケンペルの『日本記』でもまた、日本の位置、政治制度、主要農作物、伝承、帰国、植生、動物、歴史、宗教と項目ごとに情報が整理されている。ケンペルもまた、地理誌ともいえる型でもって、日本についての情報を網羅的に収集していたのだ。

２．時代状況 2　旅行記と地理誌の出版状況

18 世紀のドイツで出版された主要な旅行記と地理誌を列挙してみたい。

旅行記

Allgemeine Historie der Reisen zu Wasser und Lande; oder Sammlung aller Reisebeschreibungen, 21 Bände, Leipzig 1648-1774.

Sammlung neuer und merkwürdiger Reisen zu Wasser und zu Lande, 11 Bände,Göttingen 1750-1764.

Sammlung der besten und neuesten Reisebeschreibungen in einem ausführlichen Auszuge, worinnen eine genaue Nachricht von der Religion, Regierungsverfassung, Handlung, Sitten, natürlichen

Geschichte und andern merkwürdigen Dingen verschiedner Länder und Völker gegeben wird, 35 Bände, Berlin 1763-1802.

Neue Sammlung der merkwürdigsten Reisegeschichten, insonderheit der bewährtesten Nachrichten von den Ländern und Völkern des ganzen Erdkreises, 34 Bände, Leipzig 1768-1781.

子ども向け旅行記

Joachim Heinrich Campe, *Sammlung interessanter und durchgängig zweckmäßig abgefaßter Reisebeschreibungen für die Jugend*, 12 Bände, Hamburg 1785-1794.

Johann Andreas Christian Löhr, *Die Länder und Völker der Erde oder vollständige Beschreibung aller fünf Erdtheile*, 4 Bände, 2. Aufl., Leipzig 1815.

地理誌

Bibliothek der neuesten Länder- und Völkerkunde für Geographie-Freunde, 4 Bände, Tübingen 1791-1794.

Vollständiges Handbuch der neuesten Erdbeschreibung, 22? Bände, Weimar 1797- 1822.

Taschenbuch der Reisen oder unterhaltende Darstellung der Entdeckungen des 18. Jahrhunderts, in Rücksicht der Länder-, Menschen- und Productenkunde. Für jede Klasse von Lesern, 14 Jg. (18 Bände), Leipzig 1802-1819.

Neueste Länder= und Völkerkunde, Ein geographisches Lesebuch [für alle Stände], 23 Bände, Weimar 1806-1827.

Bibliothek der neuesten und wichtigsten Reisebeschreibungen zur Erweiterung der Erdkunde, 50 Bände, Weimar 1800-1814.

Die Erde und ihre Bewohner nach den neuesten Entdeckungen, 5 Bände, Leipzig 1810-1814.

Neue Bibliothek der wichtigsten Reisebeschreibungen zur Erweiterung der Erd- und Völkerkunde, 65 Bände, Weimar 1815-1835.

これら旅行記や地理誌の特長として指摘できるのは、多くが複数年にまたがって継続的に出版され、たいていは 20 巻以上、場合によっては 50 巻以上からなる大部のものであったという点だ。このような出版形態から確認できるのは、（ヨーロッパを中心に）全世界の情報を網羅的に収集しようという関心、つまりアンソロジーを一通り読めば、ヨーロッパが知り得た国や地域を一巡できる、いわば読書を通じて世界一周できるという知的関心に寄り添った消費スタイルである。さらに、このようなリストの形で整理することで明らかになるのは、こうしたアンソロジーが同一の出版社から出版されていたという点である。このリストのなかで出版地がワイマールと記されているものは、実のところ、同一の出版社から編集発刊されたものであった。このワイマールの出版社は、造花や彫像といった装飾品の製造業を営んでいたフリードリヒ・ユスティン・ベルトゥーフが運営していたものであった。

このベルトゥーフの出版社の歴史について調査したカタリーナ･ミデルの研究によると、上述のリストに掲載された旅行記や地理誌が出版されていた 18 世紀末頃、具体的には 1790-1800 年の 10 年間で、ベルトゥーフが出版した書籍(全 101 タイトル)のうち 19.8%が地理誌、自然誌が 16.8%を占めていた。続く 1800 年から 1810 年になると、ベルトゥーフ

は倍以上の 236 タイトルを出版し、そのうちの実に 43.2%が地理誌と各地域の歴史を扱った書籍であったことを明らかにしている。たとえばリストにもあげた *Bibliothek der neuesten und wichtigsten Reisebeschreibungen zur Erweiterung der Erdkunde* については、11 巻から 16 巻の売り上げの記録が残されている。ベルトゥーフは各巻 1000 部を刷りあげ、発刊した年度でその半数以上を売り上げ、印刷経費を相殺し儲けをあげていた[8]。

このように地理誌に類される書籍の販売が拡大していたことを示す研究からも、18 世紀後半に、地理誌や旅行記が好んで読まれていた時代であったことがわかる。

このワイマールのベルトゥーフの出版社は、日本についても複数の旅行記や地理誌を手がけていたとは言え、日本の資料が少なかった状況には変わりない。アジアそして日本を扱った *Vollständiges Handbuch der neuesten Erdbeschreibung* の第 4 巻には、この地域についての資料はいまだ限られているとして、ケンペルやトゥンベルクといった旧い史料、そして当時の最新資料であったであろうワシーリー・ゴロウニンの『日本幽囚記』[9]を主に利用して編集作業をおこなったと記されている。ベルトゥーフが出版した日本についての著作は、たしかに北海道についての記述が多く、ゴロウニンの旅行記を主たる情報ソースとして利用していることがわかる。こうした特長もまた、ある特定の情報が、繰り返し利用され流布されたことの例証となるだろう。

３．日本の盲人についての記述、ケンペルを例に

こうした旅行記や地理誌についての出版状況下において、日本の状況が具体的にどのように流布していったのかを確認したい。日本の情報のなかでも、本稿で着目するのは盲人について情報だ。ヨーロッパ社会にとって、日本の盲人についての情報ソースとなった著作は、エンゲルベルト・ケンペルの『日本記』[10]であった。

ケンペルは日本の盲人について『日本記』の中で 2 回言及している。ひとつは長崎と江戸の往復でみかけた盲人だ。

> 「稀なことなのだが、巡礼者のなかに絹の着物を着て化粧をした女性がおり、盲人の男性の手を引いて物乞いをしているのをみかけた。」
> [11]

盲人の男性が、比丘尼（女性の尼僧）と共に道端で物乞いをしている姿を、ケンペルは記録している。ただしケンペルの関心は、あきらかに絹の着物を着て化粧をしている女性へと向けられており、盲人についての詳細な情報は残していない。この比丘尼は、出家した女性で托鉢しながら説教をする尼僧の呼称であるが、いわゆる旅芸人や売春婦を意味することもあった。「彼女たちは、望まれれば、暇つぶしの相手をする」、彼女たちが客人の相

手をするのは「貧困がゆえではなく、むしろ彼女らの不逞さ、軽薄さゆである」と、ケンペルは、こうした当時の比丘尼の姿をほのめかす記述を続けている。

それとは別に、ケンペルは日本の盲人または盲人社会について、より詳細な報告も残している。この報告は、日本の土着の宗教団体である山伏の記述の付録のような形で書き残されている。山伏という魔術師まがいの団体が日本で活動していることは、フロイスの『日欧文化比較史』(しかし広く流布してはいなかったと言われている)、ヨハン・ニーホフの『東インド会社の大使より』[12]、ジャン・クラッセ『日本教会史』[13]などの著作を通じて、すでにヨーロッパに伝えられていた。また山伏の実情からかけ離れているとはいえ、マティアス・クラウディウスが、『ヴァンズベック通信』に山伏を紹介したり、『山伏』と題する悲劇が書かれていることからも、ヨーロッパ世界において、山伏という名称が一定の知名度を、獲得していたことがうかがえる。ケンペルによる盲人報告の内容を簡潔に紹介すると次のようになる。

日本には、フェーイケザド(平家座頭) Feeikesado と、ブッセツ=ザゴ(仏説座頭) Bussetz Sago のふたつの盲人団体が存在している(両者の表記にはバリエーションがある)。宗教的な組織であった仏説座頭の創設の由来は、延喜の帝(醍醐天皇)の第三または第四皇子であるゼニマール(蝉丸) Sennimar が創設したものであった。その後、平家座頭が創設され、現在はこの団体のほうが優勢である。平家座頭の由来は、源氏と平氏の争いに端を発する。平氏が下関にて破れたのち、源氏の大将頼朝は、平氏の武将カケキーゴ Kakekigo(藤原景清)を味方につけようと、景清を捕えて丁重に扱った。景清は幾度となく、頼朝のもとから脱走し、その都度捕えられた。あるとき味方につくよう頼朝に強要されると、景清は、かつての主君の仇を討つという感情なしに、頼朝を見ることができないと、自ら眼をくりぬき、その眼を頼朝に捧げた。その後、景清は日向に落ち延び、琵琶を習得し初代の検校となって、平家座頭を創設した。

さらにケンペルは、平家座頭について、位階制度をもち、楽器を演奏して収入を得ている。また京都に元締めの本部がおかれ、その下に検校の称号を有する盲人が全国の座頭を監督、またその下に、勾当や紫分という役職が続く。またこれらの称号は、金銭で買い取るものであり、早く昇格する者もいると、報告している[14]。

このようにケンペルは、『日本記』のなかで、日本の当道座について報告していたといえる。当道座の成立時期については諸説あるが、おおよそ室町時代には、日本には盲人の保護ならびに相互扶助を目的とした当道座と呼ばれる組織が存在していた。ケンペルが日本に滞在していた当時、盲人たちは当道座に属することになっていた。京都の職屋敷が全国の盲人たちを監督し、検校(けんぎょう)、別当(べっとう)、勾当(こうとう)、座頭(ざとう)、紫分(しぶん)、市名(いちな)、都(はん)という厳格な階級が設定されていた。この職位は金銭で購入するもので、その職位購入で得られた金銭を、組織の盲人たちに再分配することで、金銭的な互助をおこなっていた。当道座は明治時代に解体されるまで存続した。

職位を得るための金銭を集める手段が、『下学集』が伝えるように「諸芸の道」としての当道だった。この組織に属していた盲人たちが習い覚えた主な技芸は、平家物語を琵琶にあわせて謡うものであり、平曲を謡う盲人たちをケンペルはフェーイケザドと報告している。そしてまた、この当道座とは別に、地神教と呼ばれるお経を琵琶にあわせて唱えて各地をまわる盲僧たちの集団も存在しており、こちらをケンペルが Bussetz=Sago つまり仏説座頭と呼んでいるのだろう。

ところで日本の盲人たちは、江戸時代になると、鍼灸師を営むことが特権的に認められるようになる。中国や日本の鍼灸については、すでに 17 世紀初頭にヨーロッパに紹介され、その効果については論争もおこっている。医師でもあったケンペルもまた、『日本記』のなかで、鍼や灸といった医術を報告しているが、鍼灸師としての盲人ついての記述は残していない。

ちなみにグロウニンの旅行記には、盲人の鍼灸師について簡易な報告が残されている。それによると、江戸には 36000 人の盲人がいると記録し、彼らは、盲人組織 Orden der Blinden を形成し、医師または楽師として生計をたてていると記されている。また彼らは浴場において裸の患者に治療活動をしていると記録されているが、これは按摩や鍼の施術のことを伝えているのだろう[15]。おもしろいことに、グロウニンは当道座については記録してない。

ではなぜケンペルは、盲の鍼灸師たちの報告を残していないのか、その理由を推察することはできるが、まず確認すべきは、ケンペルが何を参照して日本の盲人について報告を書き記したのか、ケンペルの参照した情報ソースである。

４．ケンペルは何を参照したのか

どのようなソースから、ケンペルは盲人の情報を得たのだろうか。ケンペルは『日本記』のなかで 2 度、盲人について記していた、一度は、長崎と江戸の往復の途中でケンペル自身が目にした記録である。とはいえこの往来で目にした盲人について、ケンペルは物乞いをしていると書き留めただけであった。盲人を直接目撃したとはいえ、彼らの参府旅行は、厳重な監視下においてとりおこなわれたものであり、ケンペルが路上の盲人たちと直接に（通訳を介したとしても）声を交わすことはありえなかったのであろう。このように日本人と限られた範囲での接触しか許されていなかったが故に、盲人の鍼灸師について見聞する機会がなかったのか、それとも鍼灸師を営む盲人はまだ少なかったが故に、ケンペルは盲人の鍼灸師について記録していなかったのだろう。

ケンペルが活用した情報ソースの手がかりとなるのは、蝉丸や景清といった人物の記述だ。ケンペルは、蝉丸を盲人組織の設立者としてヨーロッパに伝えたが、蝉丸という人物については、いくつかの異なる伝承が残されている。ケンペルは、蝉丸を醍醐天皇の皇子と説明しているが、これは平家物語が伝える伝承である。蝉丸については、例えば『今昔

物語』の会坂の盲では、宇多天皇（866-931）の皇子敦実親王（893-967）に仕えた雑色、また源俊頼『俊頼髄脳』では、逢坂の関の物乞いと伝えられており、器楽の名手とも盲人とも記されていない。このようにケンペルは、『平家物語』を読んだか、琵琶法師が謡う平曲を聴き、その内容について説明を受けたか、または『平家物語』を知る人物から日本の盲人についての情報を得たと推測できる。

この見解は、平家座頭の創始者として書き留められているカケキゴ、つまり平家の藤原景清についての記述からも支持できるものである。景清は豪胆な平家の武将と伝えられており、謡曲や能の題材としても取り上げられてきた人物として知られているが、彼の最期については、よくわかっておらず、全国各地に伝説が残されている。例えば、現在の愛知で盲目になったとか、京都の清水寺にて盲目になったという説もある。ケンペルによれば、景清は頼朝に捕らえられた後、眼をくりぬいて頼朝に差し出し、宮崎へ隠遁し平家の盛衰を語り継ぐ平家座頭の創設者ということになっているが、景清が宮崎に隠遁したと語り伝えているのもやはり『平家物語』だった。旅行記は旅行者の直接的な見聞を記した資料と、単純にみなすことはできず、既に著された旅行記や地理誌をはじめとする文字情報に媒介されていたと本稿でも指摘してきたが、まさにケンペルの盲人についての情報も、彼の直接な見聞や調査ではなく、『平家物語』という文字情報に媒介されたものであった点が興味深い。

５．情報の流布とその変化 I

それでは、このケンペルの日本の盲人の情報は、どのように流布していったのだろうか。ケンペルの『日本記』以降に公刊された数々の日本記述のなかで、フェーイケ（Feike Sado; Feeike; Fekis, Blinde Feki, Feki, Feeki）やブッセツ（Bussetz Sado; Bussetz Sago; die blinden Bussetz, Bussets Sado, Bussets Sago）といった綴りには、多数のバリエーションが生まれることになる。これは端的に、ケンペルの記述を離れて、日本の盲人についての情報が再生産されていった例証とみなすことができるだろう。

本稿でも、18 世紀後半の旅行記や地理誌の出版状況について確認したことからもわかるように、ケンペルの『日本記』が、まずそのままアンソロジーに再録される形で広まったことは言うまでもない。また短縮版の存在も確認できるし[16]、ケンペルの記述に解説や検討を加えた版も存在していた[17]。またケンペルの『日本記』から、日本の盲人の記載だけが抜粋され流布したことも確認できる。例えば、ヴィルヘルム・ハイネの日本の地理誌『日本とその住民』では、「その他の日本の宗教団体としては」という書き出しで、仏説座頭と平家座頭について記述している[18]。その記述は、ケンペルの『日本記』を平易に要約したものであり、19 世紀中葉においてもなお、日本の盲人については、ケンペルの記述が一次ソースとして参照されていたことがわかる。

同時に、日本の盲人が事典に収録されて流布するケースも数多く確認できる。フリードリヒ・マイアーの神話事典では、仏説座頭だけが収録され、「全盲の仏説。全盲なる人々から形成された日本の宗教団体、その創設者はイェンギーノ［延喜の］帝 Jengino Mikaddo の息子ゼニマール Sennimar［蝉丸］」[19]と、簡易な説明があたえられている。それとは反対に、ピーラーの『百科事典』では、平家座頭[20]だけが収録されているのだが、さらにカケキゴ[21]もひとつの項目としてたてられている。このピーラーの事典は、専門家が参照する学術事典ではなく、社交の場で話題となる様々なテーマを解説した会話事典 Konversationslexikon の流れを汲んだ、一般読者が利用する百科事典であったことを考慮に入れる必要があるだろう。日本の盲人集団としての平家、それから自ら眼をくりぬいた景清という単語が、ケンペルの『日本記』を離れて、広く一般に伝播していたことをうかがわせてくれる。

このように、平家や仏説さらには景清という情報が単独で流布していく過程のなかで、その記述内容にも興味深い変化が生じることになる。ここで、平家座頭と景清の都落ちの報告があたらしい物語へと作りかえられた例をあげておくことにしたい。

まずケンペルの『日本記』が発刊されたばかりの、かなり早い時期に、平家座頭は事典の項目としてとりあげられていた。たとえばトーマス・ブロートンの『世界の創造から現在までのあらゆる宗教についての歴史事典』はその一例である。項目フェキ Feki では、平家座頭と源氏と争った平氏とが混同されている。その結果、平家が盲人の集団として説明されることになる。当然のことながら、源平合戦の記述が抜け落ち、必然的に、平氏の武将である藤原景清は、眼をくりぬいて、その眼を頼朝に差し出すのではなく、帝に差し出すことになる[22]。ブロートンの事典では、眼をくりぬくという景清のグロテスクな描写の影に隠れてしまったのであろうか、源平合戦という日本の内戦の記述は削除されている。ブロートンの事典に認められた、平家座頭の記述の変化は、たとえば 19 世紀に出版された宗教事典[23]でも確認できる。19 世紀の宗教事典においてもやはり、源平合戦の記述は抜け落ち、平家が盲人の集団と説明されている。

さらに興味深い例として、盲人集団としての平家を、カケキゴ団 Kakekigo-Orden として描き出す物語も登場してくる。フォン・ビーデンフェルトの『既に滅亡したまたは現在繁栄している世界の聖俗世俗団体の歴史とその組織』の記述を紹介したい。

> 「富豪で全盲であった人物フェキ Feki は、1150 年に、多数の盲人を集め、彼らの生活様式をあらため、そして相互扶助を目的とする盲人の団体を設立し、団体の長となった。そしてまたこの団体を支援し外部との交渉役とでもいうべき役割を果たしたのが晴眼の男性カケキゴ Kakekigo であった。フェキの死後、帝はカケキゴに、盲人団体を率いるよう嘆願するものの、カケキゴは帝の願いに応えることはなかった。帝の度重なる願いにもかかわらず、カケキゴは自らの態度を固辞し、眼をくりぬいて帝に差し出した。この行為に帝は感銘を受け、盲人団体を保護、カケキゴを讃えてカケキゴ団という名称をあたえた。」[24]

この記述ではフェキはひとりの個人、盲人グループのリーダーOrdensleiter として登場し、その補佐役がカケキゴとなっている。フェキの死後、帝はグループの後継者としてカケキゴを指名する。しかしカケキゴは帝の求めに応じず、眼をくりぬき帝に差し出す。この行為に感銘を受けた帝は、盲人グループを保護し、そしてこの集団にカケキゴ団という名前を与えている。このように日本の盲人社会の報告が、平家や景清といった人物の物語へと変形されている。源平合戦の記述はやはりぬけおちたままで、眼をくりぬくという行為がクローズアップされることで、はるか東方の国のスペクタクルな物語という印象を読者に与えたといえるだろう。

６．情報の流布とその変化 II

日本の盲人についての記述の変遷について、さらに別のタイプを確認してみたい。デ・マルシは、『中国、日本、インド、ペルシャ、トルコ、ロシアの新世界史』のなかで日本の歴史について記述している。デ・マルシの日本記述もまた、ケンペルの『日本記』に基づいているのだが、デ・マルシは、ケンペルの記述を自由に改編し、解説や批判を加えていた。そして日本の当道座についてのケンペルの記述[25]については、次のような補足をおこなっている。

> 「フェーキ（平家）は、おしなべて俗人であり、世俗の風俗を有している。しかし、彼らの服装は、普通の日本人とは区別できるものである。また彼らのなかには、頭髪を剃っている者もおり、かれらは仏説と呼ばれている。また人々は盲人たちを街路で目にすることもなく、また寺社で目にすることもなく、わたしたちの盲人たちのように(comm nos aveugles)物乞いをすることもない。盲人たちの集まりは、この集団に属する盲人たちの勤勉さそれから彼らの状態にふさわしい有益な仕事を営むことによって、わたしたちが認める以上の名誉をもって、盲人を養っている。」[26]

このデ・マルシの記述のなかで着目すべきは、些細な追記ではあるが、日本の盲人とヨーロッパの盲人との比較の視点が挿入されている点にある。ヨーロッパでは、物乞いをしている盲人を目にすることがおおいが、日本の盲人は物乞いをしていない。というのも、日本には盲人の互助組織が存在しており、盲人自らが労働し、組織を運営しているからだ。デ・マルシの盲人記述は、当道座の相互扶助の仕組みに焦点をあてたものである。こうしたデ・マルシの関心には、当時ヨーロッパで取り組まれていた盲人政策が反映されていると推察することも可能であろう。

ジナ・ヴァイガンは、フランスの盲人政策の歴史を扱った研究[27]のなかで、フランスの

18 世紀の盲人政策は、ふたつの意見の緊張関係のうちにおかれていたと説明している。つまり、盲人たちは博愛的に保護され教育をほどこされ、彼らが持つ能力を開花させるべきだする考えと、盲人たちもまた保護されるならば共同体のなかで相応の義務を果たさなければならないというふたつの意見の緊張関係だ。それゆえフランスの盲人政策では、18 世紀以来、盲人たちを保護し教育を施すことに重点をおく政策と、糸ツムギや印刷などの作業に従事させ、盲人たちに組織運営の財政的な基盤を負担させる政策の間で、揺れ動くことになる。このようにヨーロッパで盲人政策が模索されるなかで、日本の盲人社会が、自立的な互助組織の実例として紹介されたと、考えることができるだろう。

日本の盲人組織を模範とするような言説として、また次のような例をあげることもできる。雑誌『ミュンヘンの水曜と日曜誌』のなかで、ケンペルの『日本記』の盲人についての記述が抜粋で紹介された[28]。この記事が重要なのは、抜粋を掲載した著者が、ケンペルの著作をどのような関心をもって読み返したのかを、書き残している点だ。記事の著者は、かつて同誌にバイエルンの聾唖者収容施設の重要性を説く記事を発表していた。その記事の発表後に、知人から、日本には古くから盲人の組織が存在していると聞かされた。そこで著者は、ケンペルの『日本記』を読み、あらためて日本の盲人社会について紹介することになったというのである。この記事からも、ヨーロッパ社会が模索していた盲人福祉施設の先例を読み取ろうとする関心でもって、ケンペルの著作が読み返され、そして当道座を日本の盲人福祉施設として流布しようとする意図が読み取れる。もはやここでは、眼をくりぬくカケキゴの行為をことさら強調する必要はなくなっているのは言うまでもない。

同じように、日本の盲人組織を理想化するような言説は他にも確認できる。スイス出身の医師ヨーハン・ゲオルク・ツィマーマンの『孤独について』は、18 世紀ヨーロッパ浸透していた社交文化へのアンチテーゼであり、個人での思索や孤独な創作活動の価値を説くことで、個人という近代的メンタリティーの成立に大きな影響を与えた作品であった。ツィマーマンは、日本の盲人団体を、独り静かに創造的な活動に従事できる理想的な場として描き出している。

> 「日本には、盲人たちのアカデミーが存在する。盲目の会員たちは、国史の編纂、詩作、音楽に従事している。盲人たちは、韻文のかたちで四季を詠んだ本のなかから、とりわけ美しい一節を選びだし、高尚で感動を呼び起こす歌のついた楽曲をつくりだす。[目下のところ、阿呆つまり混乱した頭たちについて私は述べてきたわけだが、それとは反対に、]日本の盲人たちは、満足そして敬意をもって、静寂に価値を認めているのだ。その運命から光を身体で受けることを拒絶されていればいるだけ、日本の盲人たちは、心のうちなる眼をひらいているのである。光や生の享楽というものは、静寂さのなかで思索し、孤独にいそしむ場である暗い懐から、彼らを追い出すものでしかない。」[29]

ここでは、日本の盲人が、詩作や音楽といった文化活動に孤独に従事していることが高く評価されている。つまり日本の盲人の記述を援用して、当時の社交の煩わしさや世の中の喧騒をシャットアウトした孤独な状態を評価するのだ。もちろんツィマーマンは、日本の盲人社会の真の姿を伝えることに関心があるわけではない。孤独を重視するというツィマーマンが抱く一貫した関心が、日本の盲人団体を芸術アカデミーとして解釈させた、また別の言い方をすれば、日本の盲人団体を芸術アカデミーと描き出すことで、孤独の価値をヨーロッパの読者に伝えることができるとツィマーマンは考えたと解釈できるのである。キューナウの『盲目の音楽家』もまた同じような関心から、日本の盲人を芸術家集団として描き出している。

> 「盲人たちは、専門家の団体を有しており、彼らはそこで名誉の位階を授かる。彼らは、記憶力を鍛える訓練をするだけでなく、優美さをもって、謡うことも身につけている。」[30]

以上、日本の盲人の情報が、地理誌や旅行記が大量に流布した 18 世紀を通じて、変化してきた例を確認してきた。これら日本の記述を、日本の姿を忠実に伝えていない虚偽の報告であるとして、考察に足らない史料と片づけてしまってはならないだろう。というのも、こうした虚偽の報告からこそ、日本についての限られた情報が流布したヨーロッパにおいて、日本イメージが創造的に描きだされていった過程を読み取ることができるからだ。

---

[1] Pierre Claude Lejeune, *Kritische und Philosophische Bemerkungen über Japan und die Japaner*, (aus dem Französischen: *Observations critiques et philosophiques sur le Japon et sur les Japonnais*, Amsterdam 1780), Breslau 1782, im Vorbericht.

[2] しかしこうした情報もまた、時代とともに、まとまった日本記述として公刊されていくことになったといえるだろう。下記研究書のモンターヌス『東インド会社遣日使節寄稿』を紹介した部分を参照。クレインス・フレデリック『十七世紀のオランダ人が見た日本』臨川書店 2010 年、pp.149.

[3] Anton Friedrich Büsching, *Erdbeschreibung*, (unterschiedene Länder von Asia), 5. Theil, 1. Abt., Hamburg 1768, Vorrede.

[4] Vgl. Winfried Siebers, Darstellungsstrategien empirischen Wissen in der Apodemik und im Resebericht des 18. Jahrhunderts, in: Christian von Zimmermann (Hrsg.), *Wissenschaftliches Reisen - reisende Wissenschaflter*, (Cardanus, Bd.3), Heidelberg 2002, S. 29-50.

[5] 参照したのは下記のドイツ語版：Leopold Berchtold, *Anweisung für Reisende, nebst einer systemtischen Sammlung zweckmäßiger und nützlicher Fragen*, Braunschweig 1791.

[6] Franz Posselt, *Apodemik oder die Kunst zu reisen*, Leipzig 1795.

[7] Posselt, a. a O., Bd.2, S.274f.

[8] Katharina Middell, *Die Bertuchs müssen doch in dieser Welt überall Glück haben*, Leipzig 2002, S.25ff.

[9] Vasilij M Golovnin, *Begebenheiten des Capitains von der russisch-kaiserlichen Marine Golownin, in der Gefangenschaft bei den Japanern in den Jahren 1811, 1812 und 1813*, Leipzig 1817-1818.

[10] *Engelbert Kämpfers Weyl. D. M. und Hochgräfl. Lippischen Leibmedikus Geschichte und Beschreibung von Japan*, (hrsg. von Christian Conrad Wilhelm von Dohm), 2 Bände, Lemgo 1777-1779. 本稿で主に扱うのは、今日でも頻繁に参照されるケンペルの手稿を編集したドームの手になる版である。また本稿執筆に際しては、イエズス会史ジャン＝バティスト・デゥ・アルドの『中国全史』のドイツ語版の付録として収録された、ケンペルの『日本記』も参照している。両者の記述において異同があることをここで注記してお

くが、この異同が、その後の盲人の情報の流布に影響を与えたのかについては考察できていない。Engelbert Kaempfer, *Beschreibung des Japanischen Reichs*, in: Johann Baptista du Halde, *Ausfürhliche Beschreibung des Chinesischen Reichs und der grossen Tartarey*, 4. Theil, Rostock 1749.

[11] Kampfer, a. a. O., 2. Bd., S. 246.

[12] Johan Nieuhof, *Die Gesantschaft der Ost-Indischen Geselschaft in den Vereinigten Niederländern an den Tartarischen Cham und nunmehr auch Sinischen Keiser*, Amsterdam 1666.(オランダ語原典は、1665 年刊。)

[13] Jean Crasset, *Außführliche Geschicht der in dem äussersten Welt-Theil Gelegenen Japonesischen Kirch*, Augusburg 1738.（フランス語原典は、18 世紀初頭に出版されていたようだが執筆段階では特定できていない。1705 年の英訳が流布している。）

[14] Kaemper, a. a. O., 1.Bd., S.291ff.

[15] Golovnin, *Begebenheiten des Capitains von der Russisch-Kaiserlichen Marine Golownin, in der Gefangenschaft bei den Japanern in den Jahren 1811, 1812 und 1813, nebst seinen Bemerkungen über das japanische Reich und Volk und einem Anhange des Captains Rikord*, 2.Th., S.129

[16] Vgl. *Hannoverisches Magazin*, 97, 98, 100, 101 St., Hannover 1779; Engelbert Kaempfer, *Abgekürzte Geschichte und Beschreibung des japanischen Reichs aus den Originalhandschriften des Verf.*, Frankfurt und Leipzig 1783.

[17] たとえば、次の版など。出版年代からもわかるように、日本記の英訳版(1729)またはフランス語訳(1729)を参照している。Pierre-François-Xavier de Charlevoix, *Histoire et description générale du Japon*, Tome 1e, Paris 1736, pp. 322ff.

[18] Wilhelm Heine, *Japan und seine Bewohner. Geschichtliche Rückblicke und ethnographische Schilderungen von Land und Leuten*, Leipzig 1860, S.54.

[19] Friedrich Majer, *Allgemeines Mythologisches Lexicon aus Original=Quellen bearbeitet*, 1. Bd., 1. Abt., Weimar 1803, S. 338.

[20] *Pierer's Universal-Lexikon der Vergangenheit und Gegenwart*, Supplementa, 3.Bd., Altenburg 1843, S.288.

[21] Pirer, a. a. O., 4. Bd., 1.Aufl., Altenburg 1844, S.74.

[22] Thomas Broughton, *Historisches Lexikon aller Religionen seit der Schöpfung der Welt bis auf gegenwärtige Zeit*, 2 Bände, Dresden und Leipzig 1756, 1. Bd., Sp. 1105.この翻訳の英語の原典 Thomas Broughton, *An historical Dictionary of all Religions from the Creation of the World to this present Time*, London 1742, p.411.は、1742 年にロンドンで出版されたものであり、この出版年代から、ケンペルの日本記の英語版から編者が抜き出したものであることがわかる。当然のことながら、ケンペルの『日本記』の英語版でも、源平合戦をはじめとする平氏について記述はある。

[23] *Allgemeines Lexicon der Religions- und christlichen Kirchengeschichte für alle Confessionen*, 2. Bd., Ilmenau 1834, S. 19

[24] Orden des Feki (Kakekigoorden) in Japan, in: Ferdinand von Biedenfeld, *Geschichte und Verfassung aller geistlichen und weltlichen, erloschenen und blühenden Ritterorden*, 1. Bd., Weimar 1841, S.89. 出版地はワイマールであるが、上述のベルトゥーフの出版社とは異なる。

[25] とくに Kaempfer, a. a. O., 1. Bd., S.294.日本の盲人たちは貧民ではなく、それぞれの能力に応じた仕事を営んでいると報告している箇所の改編。

[26] François Marie de Marsy, *Neuere Geschichte der Chineser, Japaner, Indianer, Persianer, Türken, und Russen*, 2. Theil, Berlin 1756, S. 297; François Marie de Marsy, *Histoire moderne des chinois, des japonais, des indiens, des persans, des turcs, des russiens pour servir de suite à l'histoire ancienne de M. Rollin*, Tome 2e, Paris 1755, pp. 295ff.

[27] ジナ・ヴァイガン（訳：加納由起子）『盲人の歴史』藤原書店 2013 年.

[28] [Anon.], Nachtrag zu dem Aufsatz, *Ueber das freisingische Tabstummen=Institut, S.42-46,* in: *Münchner Mittwochs= und Sonntagsblatt*, Jg.1807, 1. Bd. (Januar-Juni), S.42-46.

[29] Johann Georg Zimmermann, *Über die Einsamkeit*, 3. Bd., Leipzig 1785, S.316.

[30] Johann Christoph Wilhelm Kühnau, *Die blinden Tonkünstler*, Berlin 1810, S. 135.